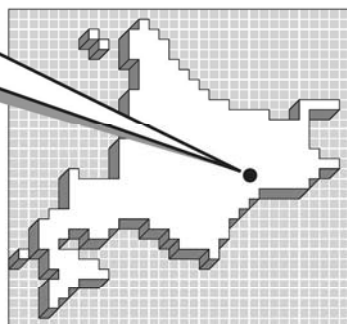


連載 わがマチの自慢 No.25

鶴居村



鶴が舞い降りる酪農郷



▲鶴居たんちょうプラザ「つるぼーの家」
(特産品や地場製品の販売、観光情報の発信など)

鶴居村は釧路総合振興局管内のほぼ中央、釧路市街地の北側に位置する人口約二、五〇〇人の村である。村の南側には日本最大の湿原である釧路湿原国立公園があり、北部の阿寒山麓を源とする久著呂川や雪裡川、幌呂川が釧路湿原に流入している。これら河川の流域

に沿って広がる久著呂、雪裡、幌呂の三原野は平坦から緩やかな傾斜地で広大な草場が広がり、大規模な酪農が営まれている。

気候は一年を通して冷涼で、夏季は時折釧路沖で発生する海霧に覆われることもあるが、内陸型の気候で釧路管内の中では比較的温暖な日が多い。冬季は晴天の日が多いが、降雪量が少ないこともあり地下凍結が1mにも及ぶ。

村名の由来である特別天然記念物タンチョウは、村ぐるみで保護活動が続けてきたこの村が大切にしているシンボルである。

酪農の概要

鶴居村の基幹産業は酪農である。酪農経営は近年、乳価

の上昇傾向や堅調な乳牛個体販売価格のもと比較的堅調である。二〇一九年の乳用牛飼養戸数は七三戸（総農家戸数八五戸）、うち搾乳戸数は六九戸で、一〇年前の二〇〇九年に比べ一三戸減少している。前半五年間の減少率が大きく、後半五年間の減少は緩やかである。乳用牛の飼養頭数は一三、三四六頭、うち経産牛は七、三九一頭となっており、一戸当たりの飼養頭数は一八三頭（経産牛一〇七頭）と大規模である。

生乳生産量は六五、〇〇〇tを超え過去最高となった。搾乳農家一戸当たりの生乳生産量は九四二tになる。経産牛一頭当たりの生乳生産量が伸びてきたにも関わらず、経産牛頭数が二〇〇九年を下回っていたこともあり、村内の生

**クミカン制度
発祥の地**

村内に本所を構えるJAK

乳生産量は六万t前後で推移していた。経産牛頭数が回復してきた二〇一八年以降は二年連続して過去最高の生乳生産量となった。

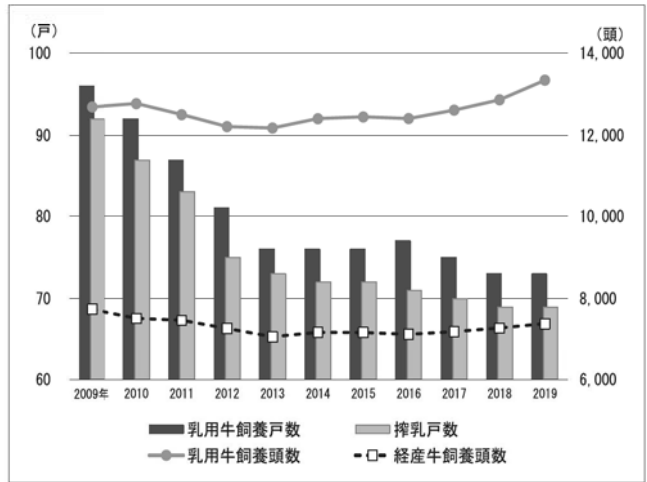


図1 乳用牛飼養戸数・頭数の推移（鶴居村）

資料：鶴居村調べ

しろ丹頂は二〇〇六年に、村内の鶴居村農協と幌呂農協、近隣の白糠町農協と音別町農協が合併して誕生した。六月上旬、JAK本所敷地内に「組合員勘定制度発祥之地」と刻まれた記念碑が（株）JAK北海道情報センターによって建立された。クミカン制度の歴

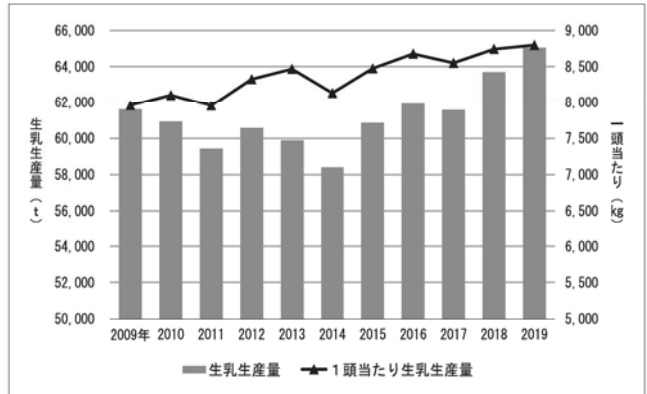


図2 生乳生産量の推移（鶴居村）

資料：鶴居村調べ

史をたどると当JAKの前身の鶴居村主畜農協（後の鶴居村農協）で運用されていた「仮渡金勘定」に行きつくという。一九五九年に「短期貸越勘定」として体系化され、釧路管内の農協に普及し酪農経営の定着と発展を支えた。それを当時の北農中央会職員が紹介し、

わずか二年後の一九六一年から「組合員勘定」として全道の農協が採用するようになったとされる。以来、クミカン制度は運用をめぐる諸課題に対応しながら本道独自の仕組みとして定着し、JAK組合員の営農と生活の向上に大きな役割を果たしてきた。



▲組合員勘定発祥の地記念碑

酪農経営を支えるシステム

鶴居村の酪農生産の大きな特色は、集落を基礎とした飼料生産に関わる農業機械の共同利用体制を整備し、機械費の削減を図っていることである。一九六〇年代後半から七〇年代にかけて第二次農業構造改善事業を活用して集落レベルのトラクター利用組合を全域に整備、その後幌呂地域では一つの利用組合に再編統合しているが、半世紀たった現在でも当時の共同利用組織をベースとした八つの組織がある。自走式大型ハーベスターの導入や専任オペレーターの雇用、地元民間企業へのオペレーター業務の委託など組合員の作業負担の軽減を図りながら運営されている。

一方同時期に、複数戸の農家で構成する協業型法人が三組織設立されたことも注目される。法人化の動きは一九九六年以降にも盛んになっており、酪農経営を行う村内の法人数は一〇を超えた。

TMRセンターについては、二〇〇六年から下久著呂地区に家族経営四戸と一法人で構成するクレインランドTMRセンターが稼働しており、現在員外三戸を含む八戸に飼料を供給している。さらに、今年から幌呂地区に家族経営五戸と二法人で構成する合同会社トイヒリカのTMRセンターが稼働、八月から飼料の供給を始めている。

哺育育成については、J Aの哺育育成センターと新幌呂育成牧場、村営の鶴居牧野が担っている。哺育育成センター

では、生後三日から八カ月齢の子牛を育成しており、三〇〇頭程度受託している。

新幌呂育成牧場は離乳後の子牛を受け入れ、人工授精して分娩二カ月前まで育成しており、七五〇頭程度受託している。また、村営鶴居牧野は夏季放牧と人工授精を行っており、七カ月齢から二〇カ月齢まで二三〇頭ほど受託している。

一九九一年に設立された酪農ヘルパー利用組合は、今年度二名の専任ヘルパーを新規雇用することができ、総勢で専任ヘルパー六名、補助（臨



時）ヘルパー三名の体制で六戸の酪農家を支援している。昨年度の利用農家一戸当たり年間利用日数は、三日である。こうした支援システムの下、近年は特に若い経営者が畜産クラスター事業を活用し、フリーストール牛舎や搾乳ロボットなど施設の近代化や省力的な機械施設の整備・導入を進めている。

チーズに新たな 特産品赤ワイン

鶴居村の自慢は村内で生産される良質な牛乳である。かつて全道乳質改善共励会で全道一位になるなど優れた成績を収めてきた。村としても乳質改善にはJAなどと一体になって取り組んでいる。一九八六年度から「乳質改善奨励事業」を実施しており、体細胞数二五万个以下など村が定める基準を満たす良質乳出荷者に、乳量1kg当たり一円以内の補助金を交付している。

この牛乳を原料として(株)鶴居村振興公社「酪楽館」では、セミハードタイプのナチュラルチーズを製造している。「鶴居」と名付けられ、熟成期間の違いなどにより「コールドラベル」や「シルバール

ベル」など六種類ある。特にゴールドラベルは中央酪農会議が主催する「ALL JAPAN ナチュラルチーズコンテスト」で、初出品となった二〇〇七年の第六回コンテストで最優秀となる農林水産大臣賞に輝いて以降、六大会連続して入賞するなど、鶴居チーズは村を代表する特産品となった。今年度熟成庫等の増改築に着手しており、増産して販路の拡大やブランド力



▲10月1日からラベルを一新した
鶴居チーズ（シルバールラベル）

の向上を図ろうとしている。この他、酪楽館では、地元産牛乳を使ったチーズやアイスクリームなどの加工体験の受け入れも行っている。

新たな特産品をめざしているのが、鶴居産のブドウを使った「クロンヌルージュ」と名付けられた赤ワインである。「クロンヌルージュ」とはフランス語で赤い冠を意味し、タンチョウをイメージする命名となっている。



▲赤ワイン「クロンヌルージュ」

ブドウ栽培は二〇一一年から十勝管内池田町の指導を受け、赤ワイン用の独自品種「山幸」の試験栽培を始めた。一四年度からは鶴居村振興公社に栽培管理を委託しており、現在約一、二〇〇本の樹が村のふれあい農園の一角で栽培されている。

醸造は池田町の工場に委託しているが、今年度は昨年産の原料を使って熟成された一、〇五〇本（一本七二〇ml）ほどのワインが完成し、村内販売やふるさと納税の返礼品に採用されている。将来的には村内での醸造をめざしており、現在外部コンサルに計画づくりを委託している。醸造技術者の確保やブドウ栽培面積・生産量の拡大が当面の課題である。

村としては、代表的な特産



▲きれいに整備された村営住宅周辺

村に暮らす よゆうな旅

品となったナチュラルチーズに相性の良い赤ワインを新たな特産品として育て、相乗的な効果が得られることを期待している。

鶴居村は「日本で最も美しい村」連合に加盟し、景観に配慮したまちづくりを進めている。

NPO法人美しい村・鶴居

村観光協会は農業者や商業者など多様な団体と連携して、タンチョウや湿原、酪農などこの村ならではの地域資源を活かし、長期滞在で村に暮らすよゆうな旅をめざす「農泊」を推進している。タンチョウの観察、搾乳体験や乳製品の加工、チーズやワインなどの食、カヌーやサイクリング、フットパス、馬など動物たちとのふれあいに、地域の人々との交流を組み合わせるとのびりと楽しんでもらい、地域経済や地域の活性化につなげようというねらいである。二〇一八年には関係者を構成員として鶴居村農泊推進協議会を設立し、農泊ガイドの育成、新しい観光体験プログラムや特産品の開発、台湾のサイクリング客やベトナムの富裕層など訪日外国人観光客の誘致

などに取り組んでいる。村内の酪農家やファームレストラン、ファームインの運営者などで構成する「鶴居村あぐりねっとわーく」は農泊推進を担う組織の一つであり、牧場見学、搾乳や子牛の哺乳体験、アイスクリームやチーズの加工体験、ヒツジの毛刈りや糸紡ぎ体験、食事や宿などを提供している。

こうした取り組みもあって近年、村への観光入込客数や外国人宿泊客数が増加してきたが、今年には新型コロナウイルス感染拡大の影響で激減した。今後は、コロナウイルス

感染症対策に配慮した密にならない観光コンテンツづくり、湿原や村内キャンプ場などを活用した鶴居独自のワーケーションツアーづくり、釧路管内唯一の広大な運動広場などを活かした近隣の道東圏域からの誘客を推進していく考えである。



村の貴重な観光資源でもあるタンチョウは、住民をはじめ関係機関による給餌など地道な保護活動が稔り、絶滅の危機に瀕していた個体数は回復してきた。その一方で、住民の生活に近い場所を利用する個体も増え、電線や車両などとの接触事故の増加やデントコーン種子・畜産飼料の食害の発生など課題を抱えている。国（環境省）はタンチョウの生息地を分散化するため、二〇一五年から段階的に給餌量を削減しており、将来的には国による給餌をやめる方針である。こうした状況の下鶴居村では、保護活動に携わる住民や農業・観光関係者、商工業者などで構成する「鶴居村タンチョウと共生する村づくり推進会議」を中心に国道、近隣市町村とも連携し、

村独自のタンチョウとの共生のあり方を模索・検討している。

貴重な開拓遺産 「鶴居村営軌道」

鶴居村ふるさと情報館の前に二台の車両が展示されている。客車や貨車をけん引していた一九六〇年製造のディーゼル機関車と六四年製造の自走客車（ディーゼルカー）で、かつて釧路市と鶴居村を結んでいた「鶴居村営軌道」の最後に使われていた車両である。昭和初期の北海道の開拓地は道路整備が十分ではなく、融雪期には凍結と融解で極端に泥濘化し入植地の交通が途絶えるなど、開拓民の生活や定着に大きな支障をきたしていた。そこで、旧内務省北海道庁は「北海道拓殖計画」に

基づき、レールによる輸送機関である「殖民軌道」（戦後は「簡易軌道」）を整備した。戦後の内務省解体で一九四八年から農林省の所管となり北海道知事が管理、五三年以降は土地改良財産に準じて町村へ運行管理が委託され、「〇〇町・村営軌道」と呼ばれるようになった。

簡易軌道はレール間の幅が国鉄線の七割程度と狭く、建設コストも運営コストも低廉だった。動力は馬力で、線路などの施設整備は北海道庁が行い、運行は地元組織された運行組合が当たった。国鉄線の駅を起点に内陸の入植地に伸びていき、人々の移動や開拓農家が使う物資、農産物等の輸送を担ってきた。馬力からディーゼルカーやディーゼル機関車による運行に代わ

るなど近代化も図られたが、一九六〇年代後半になると道路事情が急速に向上したことから、簡易軌道はその役割を失っていき、七二年までにすべての路線が廃止された。

鶴居村営軌道は一九一九年、根室本線新富士駅（釧路市）から分岐する殖民軌道雪裡線・幌呂線として完成した。当初は馬力による輸送だったが、四一年にバスを改造した木炭ガス自動車をも民間事業者が運行するなど動力化が進んでいく。五三年に国から移管されて村営軌道となり、五〇年代後半からは輸送量の増加に対応するため、自走客車（ディーゼルカー）やディーゼル機関車を導入した。一九五六年に入線した自走客車は簡易軌道では最初のものであった。しかし、この頃から道路整備が急



▲展示されている鶴居村営軌道の車両

速に進み、定期バスの運行が
始まったことなどから、一九
六八年に四〇年の歴史に終止
符を打った。鶴居村営軌道は、
「移民を受け入れるために軌
道を整備した」という点で、初
期の殖民軌道の典型であり、
その歴史から見ても、またそ
の規模から見ても殖民軌道・

簡易軌道の代表といえる路線」
である（『釧路・根室の簡易
軌道』釧路市立博物館）。

二〇一八年一月、鶴居村
営軌道など本道の簡易軌道は、
大正後期から道東・道北を中
心に国鉄線から開拓地へ毛細
血管のように伸び、人々や農
産物運び、地域の発展に大

いに貢献した鉄道
遺産として高く評
価され「北海道遺
産」に認定された。
村では今後、既
存の車両に加えて
貨車を展示するこ
とにしており、展
示方法や教育・観
光面での活用方策
について、釧路市
立博物館なども
連携して構想を策
定する計画である。

〈取材後記〉

酪農地帯で挑戦するワイン
づくり。最近「山幸」の栽培
について、鶴居村の近くや道
北の町でも取り組んでいるこ
とを農業新聞の記事が伝えて
いる。鶴居村でも「ふれあい
農園」での栽培に加え、酪農
経営の一線を退いた農業者が、
畑の一角で栽培に協力する例
も出てきているという。赤ワ
インの特産品化への道のりは
始まったばかりであり、今後
の取り組みに期待する。

鶴居村役場の皆様には、取
材の対応や資料・写真の提供
など多くのご協力を頂きまし
た。誌面を借りてお礼申し上
げます。

また、クミカン制度の成立
については、山尾政博「北海

道における『組合員勘定制度』
の成立と展開」「農経論叢」
第37編（一九八一年）、田淵
直子・太田原高昭「北海道に
おける農協組合員勘定制度と
営農指導事業」「農経論叢」
第51編（一九九五年）を、簡
易軌道については、石川孝織・
奥山道紀・清水一史・星匠編
著『釧路・根室の簡易軌道』
（増補改訂版）釧路市立博物
館（二〇一八年）を参考また
は一部引用しました。

一般社団法人

北海道地域農業研究所

特別研究員

三津橋 真一